

# 呉世昌の植民地期朝鮮における書学とその特徴

金 貴粉（国立ハンセン病資料館）

キーワード：書芸、植民地期朝鮮、呉世昌、植民地支配下の文化、日本書道

## はじめに

1910年以後、1945年の解放を迎えるまで、朝鮮は日本の植民地支配下におかれた。その間、日本の一地域として位置づけられることになった朝鮮において、書芸も「停滞史観」をもって語られるようになる<sup>(1)</sup>。また、日本を介した「美術」の導入は、本来区分が厳しくなかった書画を分離させることになった。その中で書芸<sup>(2)</sup>はどのような展開を遂げたのだろうか。

韓国の近代美術研究者の李龜烈は、植民地期朝鮮における書の担い手について、「1930年代までのみを見て、今日のような職業書芸家は何人かを除き、ほとんど存在していなかった。書芸家という言葉もなかった」と指摘し、その上で、書家、または書画家という呼称において、その時代を代表する人物を大きく三つに分類することができるとしている。その三つとは、①過去の高官大爵等を歴任していた著名な人士の中で能筆家であった者、②純粋な文士・学者として能筆家であった者、③書、または画を兼ねた活動を生業としていた職業的身分の活躍者の

三つである。その他、はっきりとこの分類に当てはまらない者も多いとし、③の分類に属する者の中には、画家として書も兼ねる、あるいは書・画のどちらにおいても長けていた者も含まれていたとしている<sup>(3)</sup>。

以上のように李龜烈が、職業書芸家は植民地期において、ほとんど存在していなかったと指摘しているが、筆者は職業書芸家の嚆矢はすでに植民地期以前から書活動を行っている者の中に認められるのではないかと考える。従って、本論では李龜烈の分類における③の職業的身分の活躍者である植民地期に新たに登場することになった職業書芸家に着目し、前述した課題について考察していく。

そして植民地期に活躍した職業書芸家の中でも、特に書の作家・鑑識家・研究者としての活動が顕著な人物である呉世昌の書学観を明らかにするため、現在、韓国の国立中央図書館に収蔵される呉の蔵書（葦滄文庫）を分析対象として取り上げる。

呉世昌に関する先行研究としては、まず、過去二回、韓国の「芸術の殿堂」において開催された展覧会開催とその図録があげられる。そこには朝鮮美術史における彼の重要性に関する指摘だけではなく、呉の開化派としての活動や、独立運動からの観点などが強調された叙述がな

- 
- (1) 洪善杓は植民地期朝鮮における美術史観について次のように言及している。「世界美術史が普遍的に発展する過程にあって、韓国では植民地史観で朝鮮王朝の主導文化自体が否定された」「韓国美術史研究の観点と東アジア」『語る現在、語られる過去—日本の美術史学 100 年』平凡社、1999 年 5 月
- (2) 日本では書を指すとき「書道」とするが、解放後韓国ではそれまで日本によって用いられていた「書道」という言葉を「書芸」に置き換え現在に至っている。そのことをふまえ、本論では植民地期朝鮮の書を指す時には「書芸」あるいは「書」とし、日本の書を指す時には「書道」あるいは「書」という語を用いる。
- (3) 李龜烈「時代状況の変化と書藝」『韓国現代書藝史』通川文化社、1981 年

されている<sup>(4)</sup>。このように、吳世昌に関する研究が増えている背景としては、資料が少ないといわれている近代書芸史の中で、比較的多くの資料が残存していること、そして解放後、「抗日派」と位置づけられてきたため、研究意義が高いとされてきたことなどが考えられる。

その他の研究については、李昇妍の一連の研究がある<sup>(5)</sup>。李は吳世昌の書芸作品や跋文を詳細に分析し、父親である吳慶錫からの影響を大きく受けた学書過程やその書風の特徴である、清の考証学の影響を受けた点を明らかにした。そして、その書芸活動から吳世昌を「民族書芸家として民族精神を継承するため、朝鮮的書芸を固守しようと努力した」<sup>(6)</sup>と評価している。

しかし、これは、植民地期に彼が書芸活動を行って行く中で、日本の植民地支配によって被った具体的な影響や、吳世昌が固守したという「朝鮮的書芸」の具体的な内実がより実証的に明らかにされなければ説得力を持たないであろう。そのためには、当時の日本との関係による影響がどのように植民地期朝鮮の書芸に表れているかという点を重視しなければならない。筆者はかつて拙稿「吳世昌における中国書法の受容と展開」(『書学書道史研究』第21号、2011年)において、具体的な吳の臨書作品や篆刻、象形古文作品と作品化させるための参考文献から、どのように同時代の中国書法の影響を受けたの

かという点について明らかにした。その中で吳世昌における書芸観は、清朝考証学の影響が強かったことと共に、線や墨色といった書の造形性や用具用材を特化し、独自性を主張するという指向性ではなく、原本に忠実に表現していくという書法態度に重きを置いていたことがわかった。こうした作品制作における態度から、作品世界という表現においてだけではなく、その制作態度においても、清朝考証学の影響が多にあったといえると同時に、その書における書芸観は、同時期の日本においても共通するものであることがいえた。

改めて「植民地下の文化」という側面で考察する時、宗主国日本との関係やその影響をどのように受けたのかという点を踏まえなければならないことは言うまでもない。先行研究においては、これまで韓国においても日本帝国主義支配からの影響の強さが指摘され、「植民地期朝鮮の書は停滞した」とする停滞史観で語られることが多かった<sup>(7)</sup>。その結果、前述した李昇妍のように停滞史観を批判する観点から、「民族書芸家として民族精神を継承するため、朝鮮的書芸を固守しようとした」という指摘につながってきた。しかし、この指摘は停滞史観への対抗軸としてあげられているようであるが、表裏一体のものとしての発展史観として捉えようとしている点は否めない。こうした指摘は、固守しようとした朝鮮書芸の内実を具体的な実証

(4) 過去二回、芸術의殿堂[芸術の殿堂](ソウル)において、吳世昌に関する展覧会が開かれた。この二回の展覧会図録は次の『葦滄吳世昌展図録』(芸術의殿堂、1996年3月)、『오세창의 전각 서화감식콜렉션 세계』[吳世昌の篆刻・書画鑑識・コレクション世界展図録](芸術의殿堂、2001年7月)の通り刊行されており、特に後者に所収されている論文は充実している。李龜烈「위창 오세창과 근대서화계 활동」[葦滄吳世昌と近代書画界活動]、鄭玉子「조선 후기 중인계층의 문예활동」[朝鮮後期中人階層の文芸活動]、洪善杓「한국미술사학의 초석: 오세창(1864—1953)의 『근역서화징』」[韓国美術史学の礎石: 吳世昌(1864—1953)の『權域書畫徵』]、俞弘濬「개화기구한말서화계의 보수성과 근대성—1860년부터 1910년 사이 미술의 동향」[開化期・旧韓末書画界の保守性と近代性—1860年から1910年にかけての美術の動向—]、이이화「개화파의 개화사상과 독립운동 —오경석과 오세창을 중심으로—」[開化派の開化思想と獨立運動—吳慶錫と吳世昌を中心に—]、정진석「오세창의 언론활동과 신문 제작의 새 기법」[吳世昌の言論活動と新聞製作の新技法]、金洋東「위창전각의 연원과 특징」[葦滄篆刻の淵源と特質]、李完雨「위창 오세창의 서예」[葦滄吳世昌の書芸] 近年、吳世昌の所蔵作品による展覧会も開催(「權域書臺 權域畫臺 名品選」展、ソウル大学校博物館年)。

(5) 李昇妍の吳世昌研究論稿に『葦滄吳世昌』(梨花文化社、2000年)、「葦滄吳世昌의 實學的藝術觀研究」[葦滄吳世昌の實學的藝術觀研究](圓光大学校大学院博士論文、2003年)等がある。

(6) 李昇妍「葦滄의 藝術世界에 나타난 民族意識과書藝觀」[葦滄의 藝術世界に表れた民族意識と書芸觀]『書藝學研究』第四号韓國書藝學會 2004年5月、311頁

から明らかにしなければ、観念論に留まってしまいうだろう。

本論では以上の問題意識に基づいて、呉世昌の書学とその特徴について明らかにする。そのために第一節では、父親である呉慶錫の書芸観をふまえ、彼の書学観の形成背景について考察する。続く第二節では呉世昌の蔵書を分析する。特に古代文字研究の蔵書と共に呉世昌が購読したと考えられる同時期の日本の書道雑誌に着目し、植民地期において呉世昌が志向した書学の特徴について明らかにしていく。

## 1. 植民地期以前における呉世昌の書学観形成

呉世昌が書芸活動に専念することになったのは、1910年の朝鮮の植民地化後であった。

呉世昌の書芸観形成や書芸活動を行った要因が、朝鮮王朝時代後期以降に台頭してきた中人階層出身の閩巷文人の系譜を継ぐ存在であることが大きいという点については、すでに指摘されている<sup>(8)</sup>。中人階層とは、朝鮮王朝時代後期、医官（医師）、訳官（通訳官）や画員（画家）、算士（会計士）等の専門職を世襲し、社会主導層であった士大夫階層の補助的な役割を担っていたが、朝鮮末期に至り士大夫文化が後退していくと、士大夫に代替する新たな勢力として浮

上していった階層である<sup>(9)</sup>。

また、閩巷文人については、金洋東が閩巷を「委巷・閩井のような意味を持ち、厳しい封建的な階級社会において、貴族または士大夫ではない階層の生活世界を指す言葉である」<sup>(10)</sup>とした上で、「主に中人、胥吏出身者が大多数で、専門知識と芸術を担った」<sup>(11)</sup>存在であったと述べている。そして彼らは、「朝鮮後・末期を通じて文筆や専門技能を要する王政の実務職に従事する中で、漢文学の実力をつけ、それを土台として士大夫に次ぐ、新たな文化担当層にまで成長し、活躍していた」<sup>(12)</sup>存在であった。

以上のように植民地期に至るまで、呉世昌が属していた中人階層を中心とする閩巷文人は、新たな書画の担い手として浮上し、活躍した。また、閩巷文人の後裔たちは、呉世昌だけではなく、植民地期においても書画界の中心を担っていったことは次のように指摘されている。「閩巷文人による作画活動は、朝鮮王朝時代末期に観賞用絵画の創作の中核となり、その人脈は開化期を経て王朝没落以後、植民地期に至る近代画壇にまで続いている。1911年に設立され、近代伝統画壇を主導した書画美術会の教員や1917年に結成された書画協会の発起人など、この時期に指導的立場にあった書画家の大部分は、中庶層の閩巷文人出身であるか、その後裔であっ

- (7) 植民地期の書については、金基昇の「近代の書芸は、平均的に概観しても、以前よりも活気が少なく、一般水準が低くなったといえる。各派を統御する主流の書風がなく、指導的な書家もない」（『韓国書藝史』大成文化社、1966年）とする意見や、任昌淳の「日帝三十六年は書芸そのものに発展を見なかった衰退期であった」（『韓国書芸概観上、下』（『韓国文化』、1983年11、12月号）とする意見が大勢を占め、全体的に「停滞史観」で語られることが多かった。近年にも朝鮮美術展覧会における作品への日本の影響について「美術はもちろん書にいたるまで「倭色」すなわち日本風の影響から自由になることはできなかった」と李東華によって述べられるように、書においても「日本風」からは自由ではなかったとの指摘がある。（「植民地時代の官展美術と韓国近代の書についての一考察」『東京・ソウル・台北・長春 官展にみる近代美術』展示図録／福岡アジア美術館他巡回展・2014年2月13日～7月21日）
- (8) 李昇妍『葦滄呉世昌』（梨花文化社、2000年）、洪善杓「한국미술사학의 초석:오세창(1864—1953)의 『근역서화징』」[韓国美術史学の礎石：呉世昌(1864—1953)の『權域書画徴』]『오세창의 전각 서화감식 콜렉션 세계』[呉世昌の篆刻・書画鑑識・コレクション世界展図録]
- (9) 鄭玉子「조선 후기 중인계층의 문예활동」[朝鮮後期中人階層の文芸活動]『오세창의 전각 서화감식 콜렉션 세계』[呉世昌の篆刻・書画鑑識・コレクション世界展図録]
- (10) 金洋東「한국근대서예의 전개와 양상」[韓国近代書芸の展開と様相]『韓国書藝一百年』所収、芸術の殿堂、1988年、306頁
- (11) 前掲(10)、306頁
- (12) 洪善杓「19世紀閩巷文人達の絵画活動과創作性向」[十九世紀閩巷文人達の絵画活動と創作性向]『美術史論壇』創刊号・韓国美術研究所、1995年、191頁

た。』<sup>(13)</sup>

以上のように吳世昌の書芸観は、彼の所属階層のもとで形成されたことが明らかにされているが、植民地期以前における吳世昌の書学観について考察していくため、本節では、(1)において、吳世昌の植民地期以前の諸活動について概観し、(2)では、吳世昌に続く閩巷文人の系譜を追い、吳世昌の書芸観を形成するに至ったその背景を明らかにしていきたい。

### (1) 植民地期以前の諸活動

吳世昌は、1864年陰曆7月15日、ソウル中部の梨洞（現在の乙支路二街）において、訳官であった父、吳慶錫（1831—1879）の長男として生まれた。父親である吳慶錫は、従一品の崇祿大夫にまで昇進し、当時、高名な漢語の訳官として、13回も燕京（北京）との間を往来した。そのため、早くから当時の情勢を察し、開化派の一員としてもその名を馳せた。また数多くの書画を持つ収集家としても高名であった。そうした父の影響から、世昌も幼少の頃から、数多くの書画作品や法帖に触れてきた。その後1879年、世昌が15才の時、彼に大きな影響を与えた父が他界する。

吳世昌の家系は、海州吳氏という代々訳官を輩出する有名な家系であり、吳世昌も1880年、17歳の時に司訳院に登第した。しかし1884年、甲申政変に巻き込まれ、広州に避難を余儀なくされる。その後、1886年、博物局の主事と政府から刊行された『漢城週報』の記者を経て、1894年の甲午改革以降からは、開化派の官僚として積極的に活動していった。1895年には、正三品工務衙門参議、農商務参書官、郵政局通信局長を歴任した後、1897年から一年間、日本の文部省に招請され、東京外国語大学の前身である東京高等商業学校の附属外国語学校・朝鮮語科教師として赴任した<sup>(14)</sup>。翌年、帰国するが、

再び1902年、開化党事件により日本に亡命する。その時、今後の運命を左右する天道教教主の孫秉熙に会い、天道教に入教し、その後、導師として活動を行うことになる。1906年には、孫秉熙、権東鎮と共に帰国し、『万歳報』を創刊、社長に就任した。その後も大韓協会等での活動において、『大韓民報』を創刊し、社長に就任するなどの言論活動を行った。そして、それは1919年の三・一独立運動の際、独立宣言書に民族代表33人中の一人として名を連ねることにつながっていく。

以上のように、吳世昌は官職生活、開化派としての活動、日本への亡命、天道教導師としての活動を積極的に行っていたが、それも1910年の日韓併合によって、それまでの活動の方向を変えざるを得なくなる。日韓併合後、『大韓民報』が廃刊され、言論生活が閉塞していく過程で、徐々に書画界との関わりを持つようになっていった。

その後、書芸活動に重点をおくことになるのだが、このように、吳世昌が書芸活動を本格的に開始する時期は、まさに朝鮮が植民地化された1910年以降と重なっていくのであった。

### (2) 吳世昌の書学観形成の背景

次に、本項では吳世昌の直接的な書芸観形成に寄与した父親である吳慶錫の書芸観を考察することで、吳世昌の書学観形成の背景について考察していきたい。

前述したように吳慶錫は、訳官として13度も燕京を往来する中で、早くから当時の情勢を察し、開化派の一員としてもその名を馳せた。また、そうした頻繁な燕京往来により当代の様々な人士達と交流を深め、書芸活動や『三韓金石録』を記すなど、金石学研究においても成果をあげた。特に田琦（1825—1854）との交流を始め、清末期の程祖慶や潘祖蔭などの書画収集家

(13) 前掲(12)、191頁

(14) 当時、外国人教師は英語科・仏語科・独語科・露語科・西班牙語科・清語科・韓語科合わせて六人おり、吳世昌はその内の一人であった。〔『東京外国語大学史—独立百周年記念—』東京外国語大学、1999年、94頁〕また、ソウル大学校奎章閣所蔵の『駐日來去案』において、吳世昌は1898年9月12日付で「家患」のために帰国するという報告があり、98年度は実際に教えていないと思われるという指摘がある。（前掲書977頁）

と交流して体得したと見られる書画鑑識は、神のような境地であるという評価が与えられたほどであった<sup>(15)</sup>。呉慶錫は、数多くの書画を持つ収集家としても名が高かったが、それは、呉世昌によって書かれた『權域書画徵』の「呉慶錫」項における次のような記述からも伺える。

「余髫年即嗜書画。顧生長斯土、無從寓目、每閱中原鑑賞家著録。不覺神往。自癸丑甲寅。始遊燕。獲交東南博雅之士。見聞益廣。稍稍購得元明以來書画百十品。三代秦漢金石晉唐碑版。亦不下數百種。雖未得唐宋人真蹟為憾。」<sup>(16)</sup>

こうした記述から、呉慶錫が、中国の人士達と交わる中で、書画作品の蒐集を始め、その種も時代を問わず、書画だけではなく、金石や碑版法帖まで熱心に蒐集していたことがわかる。そして、その数も数百種をこえたとしている。これらの作品や書物はその後、呉世昌に引き継がれ、『權域書画徵』の刊行につながっていくことになった。

呉慶錫は、書画作品も残しているが、書芸作品については、次のように呉世昌の記述から礼器碑や顔真卿を好んで学書していたことがわかる。

「先君。行楷学顔魯公。隸学禮器碑。家居常夜深臨帖。」<sup>(17)</sup>

特に礼器碑に関しては、次のように評価している。

「魯相韓勅造孔廟禮器碑。字兼分隸。縱橫變化。無妙不臻。不可端倪。漢刻中神品也。」<sup>(18)</sup>

このように、礼器碑の文字を八分と隸書を兼ね、縦横無尽の変化を来し、素晴らしい境地に達したものであるとし、それは漢刻中でも神品であるといえると評価した。また、続けて呉慶錫は、礼器碑を好む理由を次のように述べた。

「余篤好此碑。因得悟古人用筆之法。惜未見永壽三年韓勅後碑。又未知如何神奇耳。」<sup>(19)</sup>

呉慶錫が、礼器碑を大変に好むのは、古人の用筆法を明確に知る事ができるからだとしており、その後に続く、「永壽三年の韓勅後碑を見ることができないこと、そのことがわからないのも不思議なことであるが、そのことのみが残念である。」という文章からも彼の礼器碑に対する傾倒が窺える。

呉慶錫は実際に、礼器碑の跋文も残しているが、このような形式は、清代後期に隆盛した金石学の影響を受けたものであったといえる。すでに指摘されるように、これは、朝鮮後期から末期にかけて、いち早く清朝の考証学の風潮を朝鮮に伝えた金正喜の影響が大きいといえる。彼は、実事求是を主張し、実学と金石学に大きな業績を積んだこの時代の代表的学者であると同時に、卓越した書画家であった<sup>(20)</sup>。

金正喜は、1809年、24才の時に科挙に合格したが、父親である金魯敬が冬至兼謝恩副使として燕京に赴くのに際し、それに随行し、考証学

(15) 洪善杓『한국미술사학의 초석: 오세창 (1864—1953) 의 『근역서화징』』。また、同じく金正喜の影響を受け、金石学に造詣が深かった李尚迪 (1803—1865) からも、「鑑識妙入神」(『藕船精画録』卷一) というように高い評価を受けている。

(16) 呉世昌『權域書画徵』(啓明俱樂部、1928年)「呉慶錫」項中、呉慶錫によって書かれた『天竹齋割録』の再録「私は、幼い時から書画に親しんだ。振り返ると、この狭い国に生まれ、特に見るほどのものも無く、いつも中国の鑑賞家達の書物を閲覧していた。そうしている内に自分でも知らぬ間にそちらに心が傾いていった。癸丑から甲寅にかけて、初めて燕京を訪れたのだが、その時東南の見識の深い士たちと交遊する機会を得、広く見聞した。少しずつ元明以来の書画百十点と、三代秦漢の金石、晋唐の碑版を購入していき、それらは数百種をこえた。しかし、いまだに唐・宋人の真蹟を得られず、残念に思う。」(日本語訳)

(17) 呉世昌『權域書画徵』(啓明俱樂部、1928年)「呉慶錫」項「父は、行書・楷書は顔真卿を学び、隸書は禮器碑を学んだ。家にいる時は、いつも夜遅くまで、熱心に臨書をしていた。」

(18) 呉慶錫『天竹齋割録』

(19) 前掲(18)

(20) 安輝濬『韓国絵画史』吉川弘文館、1987年、168頁

と金石学がめざましく発展していた清で大きな影響を受けることとなる。そのような清代における考証学の隆盛の中で、金は阮元や翁方綱に出会ったのである。中でも、阮元の「北碑南帖論」や「南北書派論」等の実事求是を中心とした考証学的な金石学の影響を大いに受け、それは阮元への尊敬の意を表し、別号を阮堂と称したことに顕れる。

金石学の研究においても、31才で『実事求是説』を、またその後『禮堂金石過眼録』を著し、書法においては、その淵源を西漢隸に求めることになった。それは、帰国後も清の人士達との交流を続け、翁方綱を始め、朱鶴年や葉志詵から『喜平石経』、『九歌刻石』（欧陽詢）、『孔子見老子像石刻』、『敦煌太守碑』などの資料が送られ、また自身も朝鮮の古碑拓本を送る等、交流を続ける中で、金石資料をもとにした学書を継続させたことにあるだろう<sup>(21)</sup>。

金正喜が隸書に深く傾倒し、その学書を通して書の本領を体得することができることとした言説は、金正喜の書論である「書示佑兒」の中の一説である、

「隸書は書法祖家、若欲留心書道、不可不知隸書矣。」

のように、見ることができる。また、その品第については、同じく彼の書論「書圓嶠筆訣後」において、

「其品第漢隸、以禮器碑為最」

とあるように、礼器碑が漢隸の中で、最も優れたものであるとしている。このことは、呉慶錫が金正喜の書論を学び、礼器碑を熱心に学書していたことにもつながることである。

また、金正喜は、いわゆる「秋史体」という隸書をもとにした独特の書風を生み出した。それは隸書を基調とした用筆法を、楷・行・草に及ぼし、それ迄の李朝における帖学派的な優美な線質ではなく、剛健な六朝風の書風を加え、始筆を逆筆で入れる篆隸の用筆法を活用した、李朝以前には見られなかった新しい書風であった<sup>(22)</sup>。

金正喜は、その後の書の担い手たちに大きな影響を与えたが、それは具体的にどのような形になって継承され、呉慶錫はどこに位置づけられていたのだろうか。

金正喜の実事求是的な金石学と書画学を志向した一派を「秋史学派」と呼ぶが、その特徴は、中人出身の芸術人たちがその多くを占めていたことにあり、最も盛んな活動を展開し、その水準もまた高かった。しかし一方で、その実学的学問と「文字香書卷気」の芸術哲学には共鳴し、推奨しながらも、その書風のみは秋史風を帯びていない一派が存在した。それを金洋東は、「秋史書派」に対して、「秋史学芸派」と指摘している<sup>(23)</sup>。金洋東が指摘する「秋史学芸派」は、主に中人出身の訳官が多く含まれ、呉慶錫もここに位置していた。

呉世昌はこうした学問の系譜に続き、呉慶錫から考証学を学び、また自らも訳官として活動していたことから、呉慶錫の蔵書を中心に学んでいたといえる。次の呉世昌による叙述からも、呉慶錫に学ぶ機会が何度かあったことがわかる。

「不肖待側。毎指誨筆法。時在童駉。未克諦省。墜緒餘感。靡有窮己。」<sup>(24)</sup>

また、呉世昌は金正喜が朝鮮において提唱した「文字香書卷気」を記した書の作品も残して

(21) 豊島嘉穂「朝鮮書道史と副島種臣一金正喜との関連をめぐって」『書学書道史研究』第2号、1992年6月、書学書道史学会、48頁 金正喜と清の人士たちとの交流については48頁から50頁に詳しい。

(22) 楠見敏雄「李朝の書道と金秋史」『高野山大学論叢』23巻・1988年、48頁

(23) 前掲(10)、306頁

(24) 呉世昌『槿域書画徴』（啓明倶楽部、1928年）「呉慶錫」項 呉世昌はここで、自身の怠惰さゆえ呉慶錫の作品の真髄を体得することができなかつたと述べている。また、そのことは、家脈を落とすことになったという意識を常に持つとしている。

いる。以上のように、本節において述べてきたような植民地期以前の朝鮮書芸における閩巷文人らの書芸観は彼等の影響を受け、清代考証学を学んだ呉世昌に引き継がれていく。そして、それは植民地期における呉世昌の書芸活動や作品制作を支える基盤となっていったのである。

## 2. 呉世昌の植民地期における学書とその特徴

呉世昌の蔵書は、現在韓国の国立中央図書館に所蔵される葦滄文庫（全1259点・筆者確認）の中にほぼ収められている。呉世昌が父である呉慶錫所蔵の書物だけではなく、彼自身が植民地期においても多くの書物を購入し、所蔵していたことが窺える。そして、その蔵書には中国や朝鮮関係のものばかりではなく日本のものまでも含まれている。本節では、呉世昌の蔵書を分析するが、特に古代文字研究の蔵書とこれまでの研究においてほとんど取り上げられてこなかった日本の書道雑誌に着目し、植民地期において呉世昌が志向したその書学の特徴について考察していきたい。

### (1) 呉世昌の古代文字研究の蔵書

先行研究によると、呉世昌の作品の蔵書との関係性についての指摘は、「国立中央図書館にある葦滄文庫に所蔵されている薛尚功編纂の『歴代鐘鼎彝器款識』と、清の阮元による『積古齋鐘鼎彝器款識』を始めとし、翁方綱（1733-1818）・呉雲（1811-1883）・潘祖蔭（1830-1890）・呉大澂（1835-1902）・羅振玉（1866-1940）などが編纂した金石文字学の書籍は呉世昌の書芸研鑽に貴重な糧となったといえるだろう」<sup>(25)</sup> とする指摘や、「葦滄文庫には、『兩疊軒彝器図釈』、『攀古屢彝器款識』、『銅器拓片』、『薛氏鐘鼎彝器款識』、『三代古銅鑑』などがあり、これらを参考にし、作品化していった」<sup>(26)</sup>

という指摘がなされている。

先行研究で示されているように、呉世昌の蔵書には、金石文字を始めとした古代文字研究の書籍が多い。またそれらの書籍は、呉慶錫から譲り受けたものも多く含まれており、呉世昌も呉慶錫から伝えられた清代考証学の影響を強く受けていたことはすでに前節でのべた。これらの蔵書をもとに呉世昌は作品制作も行っている<sup>(27)</sup>。本節では清代考証学の影響を受けながら、植民地支配下でどのような学書志向をもっていたのかという点について、呉世昌の蔵書をもとに考察していく。

清代に入り、考証学や金石学が発達したとすでに述べたが、古代文字研究はそれ以前から行われており、南宋においても金石学の著作が残されている。葦滄文庫に収められている『歴代鐘鼎彝器款識』は1144年に版行され、古銅器の銘文と考釈からなる法帖の体裁をとったものである。南宋では新出器が少なかったため、史的研究が困難であったことが窺えるが、宋代における金文解読の集成書としての意義は高い。また、同じく南宋のものとして収められている書籍としては、王厚之によって記された『鐘鼎款識』があげられる。『鐘鼎款識』は文字の模写はよくないが、他書に著録のない器が比較的多いとされている。

その後、清代に入り、金石学の隆盛とともに学問的な研究成果が次々と現れ始めるが、その代表的な書籍として、『積古齋鐘鼎彝器款識』（以下『積古』）があげられる。阮元によって記された『積古』は全十巻で構成され、『歴代鐘鼎彝器款識』の体裁に習い、のべ560種の古銅器の銘文について文字を模刻し、その考釈を添えたものであった。阮元は、『南北書派論』や『北碑南帖論』によって、帖による南派よりも碑による北碑の優越を説いたことで当時の書壇を席捲した。また、前述したように金正喜に大きな

(25) 李完雨「위창 오세창의 서예」[葦滄呉世昌の書芸]、『오세창의 전각 서화감식 컬렉션 세계』[呉世昌の篆刻・書画鑑識・コレクション世界展図録]（芸術의殿堂、2001年7月）

(26) 李昇妍『葦滄呉世昌』、梨花文化社、2000年、143頁

(27) 呉世昌の象形古文、金石文の作品化については、拙稿「呉世昌における中国書法の受容と展開」『書学書道史研究』（第21号、2011年）を参照。

影響を与えた。

『積古』における銘文は全て原器から採った拓本に基づいたものであり、その評価については、質・量ともに従来にはなかった高い水準を誇る充実した図録、いわば当時における「金文全集」であり、清代末期にかけて世に表れた金文関係の著録に指標を与えたという意味でも重要視されている<sup>(28)</sup>。また、自序の中で阮元が、銅器の銘文は、周公・孔子以前の時代に属するから、経典を古代の言語・文字に即して意味を明らかにしようとする訓詁学の資料として尊重されなければならないとしている。阮元は学会の指導的立場にあったため、その後、金文学は訓詁学と結合して、文字学的に考究する方向を目指すことになった。金文学はここに至って、銅器愛玩の趣味から脱して学問的な研究資料となり、これ以後、拓影と考釈とを収録する金文資料集の定型をつくることにもなったとされる<sup>(29)</sup>。しかし、収録銘文には、仿製、偽作が含まれ、考釈においても粗雑な部分があった。

次に、呉雲の『兩壘軒彝器図釈』と潘祖陰の『攀古屢彝器図釈』の所蔵が確認できた。この刊行は1880年代であり、東アジアを取り巻く情勢が激しく変化したこの時期に父親である呉慶錫は訳官として清を往来し、清代の知識人たちと交わりをもった。呉慶錫が交わりをもっていた呉雲、潘祖陰による著書の所蔵は、同時期の知識人層との交遊を確認することができる。前述の『兩壘軒彝器図釈』は自蔵器の他、諸家所蔵器の太平の乱で散逸したものを集めており、『攀古屢彝器図釈』は自家所蔵の500器ほどの内から優品50器を刻し、当時の俊英が協力して考釈を加えたものであった。

その他、葦滄文庫に所蔵されている蔵書を見ると、『兩壘軒彝器図釈』や『攀古屢彝器図釈』とほぼ同時期に出された、呉大徵(1835-1902)による『恒軒所見所蔵吉金録』があった。呉大徵は、清代屈指の文学学者、金石学者であ

り、能書家としても名が高く、金文作品も多く残している。また、『攀古屢彝器図釈』の絵図も描いている。その他の呉大徵の代表作としてあげられる、金字を集字した『説文古籀補』や、文字学書である『字説』も呉世昌の所蔵が確認されたが、その中でも『字説』は文字の原義を金文によって考釈するという方法をとったものであった。

以上のように、葦滄文庫には呉慶錫から呉世昌が譲り受けた書物も多く含まれているが、植民地期に購入されたと考えられる書物から見ても、その学書の傾向は変化していなかったといえる。

呉世昌は甲骨文字についての蔵書も数冊所蔵していた。甲骨文字は殷代のものであるが、その発見は1899年になってからであった。甲骨文字が刊行された最初の書物は劉鶚による『鉄雲蔵龜』(1903)であり、当時、甲骨文字研究はその緒についたばかりであった。しかし、葦滄文庫には、羅振玉による『殷虛書契考釈』(1914)や林泰輔による『亀甲獸骨文字』(1917)が収められていたことから、呉世昌がいち早く甲骨文字研究に関心を寄せ、それらを参考文献としていたことがわかる。

また、葦滄文庫において、以上のような古代文字研究に関する書物だけではなく、日本の書道雑誌も多く所蔵されていたことが明らかになった。次に呉世昌の日本の書道雑誌との関わりについて考察していきたい。

## (2) 呉世昌と日本の書道雑誌

### ① 書道雑誌の収集傾向

現在、韓国の国立中央図書館にある葦滄文庫には、数多くの日本の書道雑誌が保管されている。日本の書道雑誌は、当時、日本の書道界や書道研究の状況を把握できる最も有効な媒体であった<sup>(30)</sup>。

当時、日本の書道界は、中国本土の碑版法帖

(28) 中村伸夫「清代後期の古代文字を素材とした書作品について」『墨』156号(2002年5、6月号)、芸術新聞社、52頁

(29) 浦野俊則「古代文字研究の発達と書」『歴代名家臨書集成・別巻』所収、柳原書店、1988年、11頁

(30) 日本の書道雑誌に関する研究は、現在においても日本、韓国両国において決して多いとはいえない。日本の書道雑誌研究は、このように近現代の朝鮮書芸史研究においても重要である。今後、この研究についての一層の深化が望まれる。



の研究と実物を紹介した楊守敬の来日によって、当時の日本人書家たちの学習法までも変えるほどの大きな変化をとげつつあった。それにより碑版法帖による古典研究と中国書論を背景とした書法の学習法が次第に浸透していった<sup>(31)</sup>。また、その携えてきた多数の碑版法帖の中には、当時の日本では珍しい北碑のものが含まれており、初めてそれらが紹介されたことは、日本の書道界に大きな衝撃を与えた<sup>(32)</sup>。その後、中林悟竹や日下部鳴鶴等、日本人で清へ渡航する者もあらわれ、直接、呉熙載や趙之謙、呉大澂などに師事し、清の碑学派を通して、さらに古文篆隸や北碑の書が日本において隆盛することになったのだが、このことは、当時、日本書道界を代表する中林悟竹や日下部鳴鶴、さらには西川春洞などの書から窺うことができる。

比田井天来においても、碑版法帖が多く出回り、それらを中心とした学書法が隆盛していく中で、それを拠り所として学んだことは明らかである。比田井天来は、日下部鳴鶴にも師事していた時期があったが、古法帖による独学が彼の中心を占めており、門人に対しても直接古典の臨書に取り組むよう指導していたという<sup>(33)</sup>。

このように、当時、中国で隆盛した清代考証

学の影響は中国国内だけではなく、多くの碑版法帖の流入により日本においてもその学書法が志向され、広く普及されることになり、そうした趨勢は書道雑誌にも反映された。

日本の書道雑誌の隆盛は、以上のような新たな学書法の登場と明治の印刷術の発達によると指摘されているが<sup>(34)</sup>、そのことによって明治の末年から大正にかけて相当数の書道の刊行物が発行された<sup>(35)</sup>。この新たな情報媒体の誕生は、書道人口の拡大という、それまでの書道界自体の変化を来たすこととなった。

呉世昌所蔵の日本の書道雑誌に関しては、筆者が韓国の国立中央図書館で調査した結果によると、年代も1910年頃から1943年まで及ぶことがわかった<sup>(36)</sup>。先行研究においては、植民地化後の呉世昌の学書状況について日本との関係の中ではふれられていない。しかし、この時期に日本の雑誌や書籍を所蔵し閲読していたことは、植民地支配下におかれた状況で呉世昌が志向していた学書の内実を考察する上で一つの指標となるだろう。従って、次にそれらの書道雑誌について見ていきたい。

呉世昌が所蔵していた『書道及畫道』は井上靈山(1858-1935)によって、大正5年(1916)10月に創刊されたものであるが<sup>(37)</sup>、井上は当

(31) 野中浩俊『書の基本資料五・現代の書道(日本)』中教出版、1992年、2頁

(32) 中田勇次郎「近代書への幕明け」『近代日本の書—現代書の源流をたずねて—』墨十月臨時増刊、1981年10月、7頁

(33) 石田栖湖「比田井天来」『近代日本の書—現代書の源流をたずねて—』墨十月臨時増刊、1981年10月、106頁

(34) 小野寺啓治「近代書道雑誌考」『近代日本の書—現代書の源流をたずねて—』(『墨』10月臨時増刊)芸術新聞社、1981年10月、116頁

(35) 青山杉雨「明治・大正・昭和期の書」『現代書道を築いた人々展図録』アポロ企画、1980年

(36) 葦滄文庫における日本書道雑誌は下記の通りである。

『書道及畫道』(書道及畫道社)第3巻～第7巻、第10巻～第12巻(以上1917年)、第2巻、第5巻、第6巻、第8巻(以上1918年)、第4巻(1920年)、第3巻(1921年)

『雕蟲』第9巻、第10巻、第21巻～第24巻、第26巻～第28巻、第30巻、第36巻、第41巻～第46巻、第49巻～第51巻、第53巻～第56巻、第64巻、第71巻、第73巻～第76巻、第79巻、第87巻(第1巻から第157巻まで明治43年7月～大正12年7月の間刊行)

『日東之華』(日東之華社)第2巻第4号、第5号、第7号(以上1926年)、第3巻第9号～第11号(以上1927年)、第4巻第2号～第7号(以上1928年)、第6巻第2号(1930年)、第14号第11号(1938年)

『書藝』(平凡社)第4巻第3号～第5号(以上1934年)

『書苑』(三省堂)第1巻第1号～第10号(以上1937年)、第2巻第1号～第3号(以上1938年)、第3巻第2号、第5号～第10号(以上1939年)、第5巻第5号、第8号～第12号(以上1941年)、第6巻第1号～第6号、第8号(以上1942年)、第7巻第7号(1943年)

(37) 飯島太久磨「書道及畫道」、飯島春敬編『書道辞典普及版』東京堂出版、1995年、379頁

時、日中の真跡や拓本の類を収録し、近代書道を方向付けた雑誌である『書苑』<sup>(38)</sup>にも多くの書論を執筆しており、書道を学問的に追究した数少ない書家の一人であったとされる<sup>(39)</sup>。それゆえ、この『書道及畫道』も学術的な紹介雑誌となっている。

また『書藝』は、古典を一通り総括的に収録し、1930年に平凡社から刊行された『書道全集』で編集を行った野本白雲（1897-1957）がその次に着手した雑誌であった。この雑誌はもともと『書道春秋』という競書雑誌であったものから競書の部分を取り除き、専門書に移行したものであり、中国や日本の碑版法帖や新資料紹介を目的としたものであった。

呉世昌が晩年に購読していたと思われる『書苑』は、昭和12（1937）年1月から昭和19（1944）年2月の廃刊に至るまで三省堂から刊行された月刊誌である。この雑誌は主として中国の古典の特集号を組み、書の古典の歴史的・学術的な研究の基礎がこれによって確立したといわれている<sup>(40)</sup>。呉世昌は、その創刊号から1943年7月発行の第七巻第七号に至るまで購読していたと思われる。

また、篆刻にも造形が深かった呉世昌は、その当時、日本で2冊しか出されていなかった篆刻雑誌の内の一つであった『雕蟲』を講読しており、それは33冊を数えた。『雕蟲』は明治43年（1910）7月創刊の会員制の篆刻専門の印譜誌であり、『筆の友』や新聞などの競書や競技制ではなく、印譜集には古今の名品と会員の作品が実押で集められ、石井雙石の漢文による批評が載った。また、印学、古今印品、同人近業、印評、論壇、紙上添削、質問応答、雑報で構成されていた<sup>(41)</sup>。

『雕蟲』の創刊目的は、長思印会規約によると、「一、本会ハ故五世浜邨蔵六門人及其他ノ有志者ヲ以テ組織シ篆学ニ関シテ相互ニ研究ヲ為シ故人ノ意思ヲ継承発展シ以テ其靈ヲ慰スルヲ目的トス。二、本会ハ長思印会ト称ス。」とあり、『雕蟲』は浜村蔵六の門人や蔵六を慕う人々を会員として発刊された<sup>(42)</sup>。

『雕蟲』は、発刊から35年もの間ほぼ定期的に刊行されたが、呉世昌所蔵の号数を見ると、呉世昌が講読していた時期は『雕蟲』の活動の中でも初期にあたる時期であったといえる。『雕蟲』は月刊で続いていたので、1911年から1917年頃であると考えられる。筆者が調べたところ、呉世昌自身の印を探すことはできなかったが、小野寺啓治の指摘によると、創刊の会員が15名であったことから、初期の部数は50部を割ったとしている<sup>(43)</sup>。このことから、呉世昌は当時、日本でもその研究の緒についたばかりの篆刻研究状況に高い関心を示し、自ら数少ない会員の一人として参加しながら、その最先端の学術成果を会得しようとしていたと考えられる。

以上見てきたこれらの雑誌は、当時、競書に軸をおくものと、書芸研究に力をおくものものに大きく二分されていた。この時期、中学校習字科（昭和10年からは書道科）の免許状は、文検制度によって取得されることが通例であり、その受験参考書として使用されていた書道雑誌も学術性の高いものが多かった<sup>(44)</sup>。呉世昌は競書雑誌よりもこれらの図版が充実し、中国や日本の碑版法帖や最新資料を紹介している学術性の高い雑誌を主に講読していたことが明らかになった。

(38) 新川晴風「書苑」、飯島春敬編『書道辞典普及版』東京堂出版、1995年、375頁

(39) 前掲(37)、379頁

(40) 前掲(34)、118頁

(41) 小野寺啓治「印人と篆刻雑誌」『季刊書道ジャーナル』20号、1990年、34頁

(42) 宮坂直樹「雕蟲の歴史」『季刊書道ジャーナル』20号、1990年、39頁

(43) 前掲(41)、34頁

(44) 魚住和晃「近現代の書壇」『書学学用一書の歴史と文化一』藝文書院、2001年5月1日、123頁

## ②呉世昌と『日東之華』

前述した日本の書道雑誌の他に葦滄文庫には『日東之華』という雑誌が収蔵されていた。また、呉世昌が『日東之華』の社賓として関わっていたことも明らかになった<sup>(45)</sup>。『日東之華』は、1925年の秋に創刊された書道雑誌である。内容について概観するため、1927年9月に発行された第三卷第九号の目次を次にあげたい。

### [写真]

- 一朱大勳書（對聯）
- 一橘守部書（色紙）（田口米舫先生藏）
- 一顧杞筆山水（林文昭氏藏）
- 一菘翁書山田公雪宛碑
- 一金敦熙先生書
- 一工藤文哉先生李漢福先生合作
- 一加藤善清先生繼色紙

### [手本]

- 一高林五峰先生隸書教育勅語
- 一豊道春海先生楷書正氣歌
- 一加藤芳雲先生行書蘭亭臨
- 一中村春道先生草書赤壁賦
- 一假名

### [記事]

- 一制限漢字の実用化と役に立つ草書（美術学校校長正木直彦）
- 一寫生畫觀（島田訥郎）
- 一意氣壯なる金子堅太郎子（不言居士）
- 一錢塘名家朱大勳と米舫先生（芳雲）
- 一千字文字源鈔（安本春湖）
- 一手紙文用語解説（日東學人）
- 一漢詩（餘香吟社）
- 一幽白堂小稿（上眞行）
- 一徽浙印選（楠瀬日年）
- 一審査短評
- 一硬筆に就いて（不言居士）※注（ ）内執筆者名

以上のように古典の図版と社賓を中心とした作品の紹介、そして書道に関するコラムと選書審査評が主となっている。作品の添削を受けることができる社員には賛助員と社友の二種が設けられている<sup>(46)</sup>。

葦滄文庫に収められていた1927年10月3日発行の第三卷第十号における主幹は加藤芳雲となっており、顧問には、今泉雄作、寛克彦、田口米舫、野村素介、関根正直の5人の名が連ねられている。この中で、今泉雄作と田口米舫は、それぞれ朝鮮美術展覧会（以後朝鮮美展）の書部で審査員も務めた。

一方、社賓の中には、呉世昌だけではなく、当時、朝鮮美展において書部の審査委員を歴任していた金敦熙や李漢福、金容鎮もおり、当時、朝鮮書画界の中枢を担っていた人物が含まれていたといえる。金敦熙や李漢福の作品が雑誌内に載せられていることは前述した『日東之華』第三卷第九号から確認できる。

これらのことから、朝鮮人書画家である彼らが、併合以後、日本の書道雑誌を媒介として、一見すると書画の分野における日本人との共同研鑽の場を持ち始めたようにも見える。しかし、これは当時の状況把握を欠く見方であろう。それは次のように社賓として朝鮮人書画人以外に名を連ねた日本人について考察することからそのように考えられる。

朝鮮人書画人以外に社賓として名を連ねた人物として、当時の財界人である渋沢栄一や、東京美術学校校長の正木直彦、東京帝国大学の黒板勝美等の名が見られるが、書画の一雑誌の内容に及ぶまで参与していたとは考えにくい。つまり、社賓とは雑誌運営に直接携わる顧問とは異なる役割を担っていたのではないかと考えられる。黒板勝美は、朝鮮総督府の行った朝鮮史編纂と朝鮮古蹟調査において最も中心的な役割を果たした人物であり、この二つの事業は日本の植民地支配の正当化を目的として行われてい

(45) 『日東之華』本文中に記載

(46) 『日東之華』第3卷第10号、昭和2年(1927)10月3日中に記載されている「社則摘要」には次のように社員の類を分けている。「賛助員 本社の趣旨を賛し左の諸項によりて其の事業を援助せらるる者とする。一、一時金若干を寄贈するもの。二、年額金拾圓を納むるもの(三回分納適宜)。三、誌代金六圓を前納するもの。社友『日東之華』購讀者」

た<sup>(47)</sup>。また、同じく社賓の徳富蘇峰は、総督府の御用新聞であった『京城日報』の社長であり、朝鮮書芸について造詣の深かった工藤壮平は、総督府事務官であった。彼らは植民地朝鮮内で総督府を中心とした権力構造の中で権威をもっていた人物であったが、彼らの名を社賓として据えることで、朝鮮内での一定の権威確保を狙ったものとも考えられる。

また、それに伴って朝鮮人書画人たちが名を連ねたことも、雑誌創刊の中核を担う者達が朝鮮書画界への影響力を企図したものであると考えられる。吳世昌がその中でなぜ社賓になったのかという点について、彼自身の言葉は残されてはいない。しかし、雑誌が創刊された1925年は、三・一独立運動加担によって投獄、釈放された四年後であったため、社賓として参加せざるを得なかった状況であったのではないかと考えられる。

雑誌の創刊目的については、その中で明確にされていないが、1927年10月3日発行の第三巻第十号中の「明治節を迎えて」並びに、田口米舫による「朴侯爵の意味ある雅懐」からその意を解することができる。

「・・・我が『日東之華』は、専ら文藝美術方面の高尚なる趣味の修養と其の研究努力によって人心の墮落を救はんと圖り、大正十四年の秋、特に此の尊い意義ある十一月三日を以て創刊して于茲三年、蓋し其使命重くして其の抱負の大なるものがある。希くは社賓諸彦並に社友諸氏、此の光輝ある明治節を迎えて明治大帝の御遺徳を仰ぎ奉ると共に、前古未曾有の盛世を永久に記念し、斯道の振興と各自の修養を以て昭和の御代に恥ぢざる国民となり、益々邦家のために奉公の誠を蓋して大御心に報ひ奉ることを誓はう。」<sup>(48)</sup>

また、顧問であり朝鮮美展の審査員も務めた

田口米舫は、書を媒体とした「親善」について次のように語っている。

「嘗て上海の老友李平書氏が、慶曆の淳化閣帖を影印する時に僕に序跋を請はれた。其の跋の末節に、世間では日支親善といふことを盛んに言はれて、種々の親善の方法を唱へられたが、其の中に未だ一つ此の事だけは言ふものが無かった。といふのは文墨数奇を以て親善を圖ることが最も平和を意味する自然の親善ではあるまいか、即ち夫れが何等の故障のなき圓滿なる方法としての親善であるといふことを書いたことがあった。

其の後、平和博覧会第一部の第十三類即ち書の部の部長であった前の文部次官赤司鷹一郎氏の推薦によって、朝鮮総督府の美術展覧会の第三部即ち書の審査員を総督府から囑託されて、而も其れが第四回にまで及んだ。其の第三回目の時、ふと想ひついた事は矢張り支那、朝鮮、内地との圓滿なる融和の方法として文墨数奇の外には之れを求むべきものなしと思惟して、日鮮支が所謂文墨の方面に関する合歎の雑誌を時機を得て発刊して彼此の美的精神を弘道することが出来たならば、夫れこそ徹底した親善の第一歩を印することにならうから、洵に喜ばしいことだと考へたので、其のことを朴侯爵に謀つたらば、侯爵も其の他の人々も非常に賛成された。・・・要するに僕の希望としては『日東之華』が他日に於て自分の前述の如き理想とせる域に近づくことが出来る日を期待して止まぬ次第である。」<sup>(49)</sup>

このように田口米舫は、「文墨数奇を以て親善を圖ることが最も平和を意味する自然の親善」であると考え、朝鮮美展の審査員経験を経る中で、さらにその思いを確固たるものとし、その目的達成のために『日東之華』刊行に至ったとしている。

(47) 李美那「李王家徳寿宮日本美術品展示—植民地朝鮮における美術の役割」『東アジア/絵画の近代—画の誕生とその展開』静岡県立美術館、1999年、126頁

(48) 「明治節を迎えて」『日東之華』第3巻10号、1927年10月3日発行、1頁

(49) 田口米舫「朴侯爵の意味ある雅懐」『日東之華』第3巻10号、1927年10月3日発行、6頁

しかし、ここで彼がいう「親善」とは、「支那、朝鮮、内地との圓滿なる融和」であり、その方法として「文墨数奇」が用いられた。朝鮮人に許された雑誌への参与は、雑誌創刊の中核としての活動ではなく、社賓という立場で名を連ねることのみであった。それは決して植民地朝鮮において、対等な立場で親善を図るものではなかった。

以上のことから、呉世昌が日本の書道雑誌を講読していたことについて次のように考えられる。

呉世昌は、図版が充実し中国や日本の碑版法帖や最新資料を紹介している日本の書道雑誌を主に講読していたことが明らかになった。このことから、日本の書道界に自らの作品を位置づけていこうとするのではなく、当時の日本書道の研究状況を把握し学ぶことで、自身が体得してきた書芸体系を基礎としながら、自らの研究の深化を図ったと考えられる。

また呉世昌が『日東之華』に社賓として関わっていた点については、この雑誌が三・一独立運動への加担によって彼が投獄され、そして釈放された4年後に創刊されているという事実を踏まえる必要があり、事実上この雑誌への参与を拒否できない状況に置かれていたと考えられる。朝鮮人である呉世昌には、雑誌編集における主体的な参与などは許されなかったのではなか

## おわりに

本論では以上のように呉世昌の植民地期朝鮮における書学とその特徴について考察してきた。第一節では、呉世昌が書芸活動に専念する前にどのような活動を行っていたのかという点をふまえ、呉世昌の書学観形成の背景について考察した。

彼の書学観形成の背景については、書芸活動に専念する以前の朝鮮王朝時代末期において、開化派の訳官として活動していたことや、閩巷

文人の系譜を継ぐ存在であったことが大きいといえた。そしてその書学観を支えるものは父親である呉慶錫から伝えられた清代の考証学であったことが明らかとなった。

第二節では、呉世昌の蔵書中でも古代文字研究関係の書物と日本の書道雑誌に着目し、植民地期において彼が志向した学書の内実について考察した。その結果、呉世昌は植民地期においても父親から受け継いだ清代考証学に基づいた書学観を根幹にすえ、古代文字研究のための蔵書を多く所蔵していたことが明らかになった。また、呉世昌による日本の書道雑誌の収集傾向は、図版が充実し、中国や日本の碑版法帖や最新資料を紹介している雑誌が主であった。さらにそれらは学術的要素が強いことがわかった。これらが蔵書における特徴といえる。このことから、日本の書道界で自らの作品を位置づけていこうとするのではなく、当時の日本における書道の研究状況を把握しつつ、自身が体得してきた書芸体系をもとに研究の深化を図ったと考えられた。

筆者はこれまで約千点に及ぶ中国・日本・朝鮮の書画作品が収蔵されている須永文庫（佐野市郷土博物館蔵）の調査を通し、近代朝鮮書人たちの作品が多数収められている理由として、漢学者・実業家・活動家であった須永元独自の活動や人脈によって形成され、時に国を超えた交友関係によって築きあげられたものであったと指摘した。さらにそれを形作った背景として明治期における漢詩の隆盛があり、須永や岡本黄石らが生きた時代の日本人と朝鮮人双方における「書」が、漢詩という共通する素養を基礎に据えた上で価値を持ち、たとえ時代的に困難な状況においても、深い信頼関係を築くのに寄与したことを明らかにした<sup>(50)</sup>。

「書」は文字を媒体とする芸術であり、言語的中心はあくまでも漢文であり漢字であり、それは当時の日本においても共通するものであった。明治の初期から文壇において漢詩文が隆盛し、書においては「中国」がその文化的価値観

(50) 金貴粉・佐々木佑記「佐野市郷土博物館蔵「須永文庫」における書画作品—コレクション形成過程とその特徴—」『大学書道研究』第10号、全国大学書道学会、2017年3月

の中心に据えられていたのである。

家学によって父親から受け継いだ清代考証学に基づいた書学観は植民地期においても変わることなく維持されていたことが呉世昌の植民地期朝鮮における書学の特徴であるといえる。父親から受け継いだ蔵書に加え、朝鮮、中国のみならず、日本の書道雑誌もその蔵書に加えることにより、当時の書における最新の研究成果を獲得することで、「停滞史観」とは異なる朝鮮の書に関する研究、鑑識、作家活動を展開しようとしたのではないかと考えられた。

今後は呉世昌の書芸活動をより詳細に考察することにより、植民地期朝鮮における書の展開とその内実について「植民地支配下の文化」という視点で明らかにすることを課題としたい。

#### 【付記】

本稿は JSPS 科研費 17H02291 ならびに JSPS 科研費 16K02350 の研究成果の一部である。